# メーカーと協力し処理実現

## ワコー産業

## 塗料混じりブラスト砂R

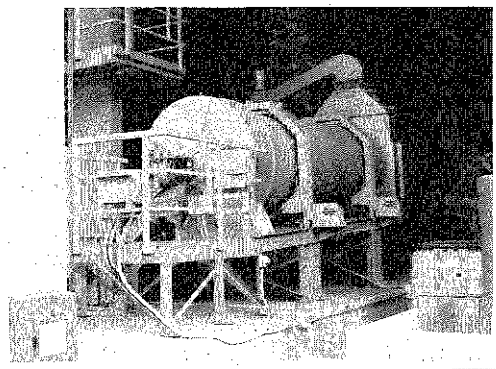
再生砕石や建廃処理などに取り組むワコー産業（和歌山県印南町、山本雅弘社長、☎0738・45・0205）は、塗料を含むサンドブラスト廃砂のリサイクル事業の拡大を図る。環境装置メーカーの近畿工業（神戸市）の協力のもと、独自の処理技術で残渣物を発生させずに再資源化。幅広い顧客ニーズに対応していきたい考えだ。（関連記事1面）

同社は1988年の創業。母体となるグループ建設会社「和興建設」の環境部門として、再生砕石を中心に、建設汚泥処理、建設残土処理、木くずリサイクルなどを展開してきた。そうしたなかで、工場メンテナンス作業を請け負う造船所から、船舶のサビ落とし作業に伴って発生する、塗料を含むサンドブラスト廃砂の中間処理について相談を受け、選別・原料化に向けた検討を開始した。

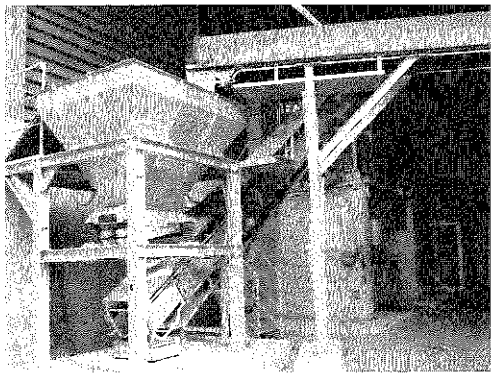
当初、近畿工業製の振動ふるい機のみで選別し、2017年に処理許可を取得。しかし、雨などで処理対象物が濡れた場合に選別しきれないケースも出てきた。そこで、建設会社としてアスファルト合材を製造してきた知見を活用。「乾燥工程を導入することで安定した選別ができないかと近畿工業側へ相談し、一緒になって処理方法やプラント全体の構成を作り上げていった」と同社山本社長は話す。

現在のサンドブラスト廃砂リサイクルプラントは、処理能力50ㅌ／日。キルン式乾燥炉、振動ふるい機、風力選別機で構成する。投入した処理物は、まずキルン式乾燥炉で水分を飛ばして砂と塗料くずを分離。続く振動ふるい機で1次選別、さらに風力による2次選別で軽量な塗料くずを飛ばし、ブラスト材と塗料くずとを回収する形だ。回収したサンドブラスト材は再生砂となり、路盤材や埋め戻し材として活用。塗料くずは製鋼副資材のフォーミング材の原料として出荷する。

この他にも同社では、日量1000ㅌの生産能力を持つ砕石事業や、36万坪に及ぶ建設残土処分場の運営なども展開。建設会社として太陽光パネルの設置やメンテナンスも行っているため、使用済みパネルのマテリアルリサイクルも検討中という。山本社長は「再生砂はニーズも大きく、現在でも年間5000ㅌほど生産している。今後は年間1万ㅌを目標に、処理の全国展開を進めたい」とした。



アスファルト合材製造をヒントにキルン乾燥炉を導入



プラント全体のエンジニアリングは近畿工業が担った

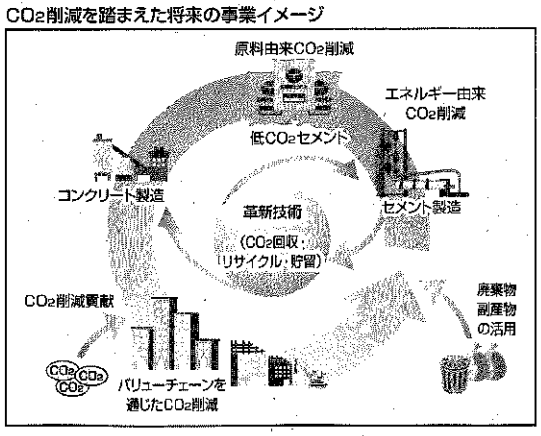
## 太平洋セメント

## 長期ビジョンの施策を策定

### バリューチェーン全体で取り組む

太平洋セメントは30日、2050年を展望して温室効果ガス排出80%削減を目指した長期ビジョンの具体的な施策を策定した。「セメント生産におけるネット$CO_2$排出原単位の削減」と「セメントおよびセメント関連製品のバリューチェーン全体を通じたさまざまな$CO_2$削減への貢献」で構成する。長期的な成長システムの大幅見据えて、ンを同社グル達すべきゴ位置付けた。

具体的な00年を基準年までに▽化ギー代替由来$O_2$を除く1ㅌ当たりの原単位を80%それ以外の%に相当する出削減貢献的なゴールにいる。




## モリタ環境テック

## 爆発抑制装置1号機を納

### 破砕設備の安全性

破砕機などを製造するモリタ環境テック（本社・千葉県船橋市、中野中経社長、☎047・457・5111）はこのたび、資源リサイクル施設等で稼働する破砕設備に付帯させる爆発抑制装置「ハイパー」1号機をプ サイクル（本